



## ひゅーるぽん

2020.12

188

認定 NPO 法人

こども発達支援センター・就労継続支援B型事業所ひゅーるぽん

〒731-0102 広島市安佐南区川内 6-28-15

Phone: 082-831-6888 / info@hullpong.jp

## その人だからこそできることを大切に

## 表現がつなぐ力、表現が創る幸せ



この出会いは、9月24・27日に開催されたイベントでした。私たち「ほっとスペースぽんぽん」は、このイベントにオリジナルグッズを持って販売に出かけました。同じイベントにコーヒーの販売にいられたいたキッチンカーの方との出会いが、新しいつながりを生んでくれました。

イベント会場で、黙々と絵を描く人。

小さなスケッチブックに、サインペン一本。車の絵を左から右へ描き進めていく様子を、じやまないようにと気遣いながら見ている方。「すごいね」「うちの車も描いて欲しい」そんな言葉も全く聞こえてない様子で、集中してペンを進めていました。4日間のイベント最終日。この日、朝からこれを描くと決めていた様子で、販売の準備が終わるとおもむろに描き始めたのが、キッチンカーでした。同じように、ペン一本で左から右へ描き進めています。よく見えるところに移動しながら描き進める様子を、キッチンカーの方や他に販売にいられた方々とワクワクしながら一緒に見守りました。よく見える事が優先になり、遠慮なくいろんなところに座る姿に私たちはハラハラするのですが、そこに描く絵がある事で周りの空気が変わります。優しく見守って、どこまで進んだかなと時々確認し

「わー。嬉しい。涙が出そう。」「宝物にします。」

そう言っ、一枚の絵を大切に受けとってくださいました。

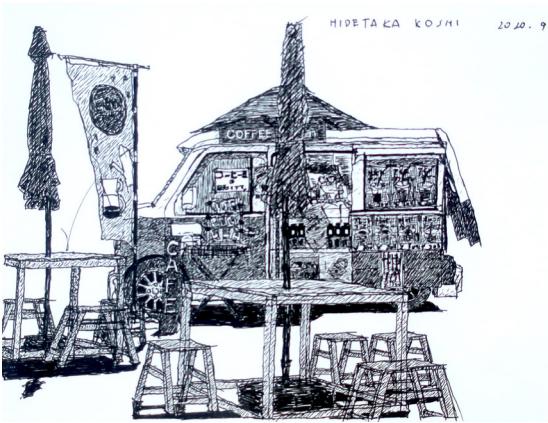
今回は、ぽんぽん（就労継続B型事業所）の活動とそこで大切にしていることについてお伝えします。

障がいのある18歳以上の方の支援をしているぽんぽんは、働くことを支援しています。私たちのような事業所は、一般的に、企業の下請けの作業や自主製品の製造・販売をしています。ぽんぽんでは、これらの事業を行う上で、彼らが得意なこと、彼らにしかできないことを大切に、社会やいろんな人となつながつて生きていくことを支援したいと思っています。そして、働くことに加えて、「表現活動」に取り組み、大切にしています。得意な事、彼らにしかできない事を自由に安心して表現する場をつくる事。それを通して、たくさんの人や社会とつながっていききたいと美術表現に取り組み始めて約20年が経ちます。この間、作品を通してたくさんの方々に知っていただき見ていただくことができました。ここ最近では、作品を通してより本人たちとつながっていいようにしてくださる方が増えてきました。作品のレンタルをしてくださる企業さんが、もっと見て欲しい知って欲しいと様々なイベントに招待してくださること。作品を招待してくださる美術関係者の方。この人に絵を描いて欲しいとオーダーアートを申し込んでくださる方。本人を知りより身近に感じてくださいる方、ひとりの表現者として

て尊重してくださる方が、また多くの出会いを運んでくださいます。私たちサポートする側にも、多くの出会いと喜びを運び広がりを生んでくれています。

そして、2017年から、ともに創り表現したいと思われる方々との取り組みも進めています。それが、「演劇」です。これからも、安心して自由に表現する場を大切にしながら、いろんな形でともに生きる方々と一緒に、彼らの表現を形にしていきたいと思っています。

ぽんぽんでは、彼らのアートが身近にある幸せとともに感じている。ただたく特徴を活かしたグッズの制作もしています。気になった方は、ぜひ、アートのグッズも見に来てください。

[www.hullpong.jp](http://www.hullpong.jp)

かもしれません。そして地球社会の持続可能な可否はわたしたちの内にあることを感じます。

アメリカの心理学者マズローが提唱した5つの欲求については以前もここで書かせていただきました。しかし、後日マズローは、さらに上位の欲求「自己超越の欲求」を提唱しています。その欲求とは、「社会をより幸せにしたい」とか「世界平和を実現したい」など、自分のエゴを超えた欲求と言われています。

本当に辛い一年でした。しかし、そのような中であっても、たくさんの希望に満ちた行動もありました。工夫し、かたちを変えて行なわれた表現・文化・スポーツ活動。日本中のあちこちで打ち上げられた花火。地域にあっては、コロナ禍をものともせず訪問、見守り活動に汗を流される民生委員さん。医療崩壊が起きたワシントンには全米からボランティアの医療関係者が駆けつけました。さらに10月には、批准国が50カ国となり、いよいよ核兵器禁止条約が来年一月に発効することも報じられました。これは、草の根の力が世界を動かしたとも言える、大きな希望と喜びを感じる出来事でした。

コロナ社会を経験している私たち。今こそ、いや今から私たちは、人間にしか持ち得ないこの「自己超越の欲求」を意識して生きるべきではないでしょうか。これが、人間の持つ欲求の矛盾を解決し、さらには「自らさえもコントロールできなくなった超消費主義社会」を新たな社会へとステップアップすることができる手段ではないかと考えます。

新しい年が来ます。私たちは、こうした思いを胸に、ともに手を携え、社会に幸せあるつながり、感動のあるつながり、希望を生むつながりを創っていききたいと思います。

「この子らと世に光を」の歩みは決してぶれることはありません。

川口隆司

## Message...



## 矛盾を超えて

去る10月22日に、文部科学省より「問題行動・不登校調査」において全国の不登校の小中学校児童生徒が18万1272人となり過去最多を更新したことが発表されました。前年と比べ約1万7千人増え、これで7年連続の増加になるそうです。この数にも驚きますが、私が注目したのは、学校が判断したというその要因です。第1位は「本人の不安や無気力」としており、これだけで全体の約4割を占めるという結果でした。私たちひゅーるぽんにおいても1990年代より、多くの不登校と言われる子どもたちと出会ってきました。しかし、振り返ってみると、彼らは、「不安や無気力」のように見られやすいというのが正しいように思います。実際に、話をし活動をともにしていくと、「そこまで？」と思えるほど優しさや思いやりが強かったり、一定の時を経て、一気に勉強をして高校入試をクリアしたり、高校で生徒会長や部長を経験したりなど、びっくりするような力を発揮する子はたくさんいました。もちろんすべての子がそうとは言いませんが、「無気力」だけのまひゅーるぽんを去る子は一人もいませんでした。「個人の問題」ではおそらく「社会の問題」、言い換えると「社会のひずみ」が起こす問題ではないかと私は常々感じてきました。

さて、この「個人の問題」という言葉で同時に私が思い浮かべるのは、「自助・共

助・公助、そして絆。まずは自分でやってみる。」という総理大臣の言葉です。ここでも「個人」つまり「自助」が強調されています。このことについては、10/15付けの中国新聞でも「(行政が)自助を強いることは主体的と言えるのか」(NPO法人抱樸奥田理事長)、「どうしてもダメなら国が守るという発想でいいのだろうか」(シニア生活文化研究所小谷氏)と、取り上げられていました。まずは自助という考え方は、さきほどの「不登校の要因」と同様にその裏側に「自己責任だよ」といわれている気がします。多くの人も指摘されているように、これでは、自分から「助けて」を言えなくなってしまうのです。

「共助」についても同様です。高齢化や過疎化など様々な理由で「共助」がままならない地域はますますいわれのない責任を感じてしまうことにつながらないでしょうか。世の中は総じてこういう流れなのかもしれません。しかし、実際は、「まずは自助」と言えるような、世の中ではないように私は思うのです。なぜなら、現に、このコロナ禍にあって、あるいは、原爆投下直後の広島において果して「まずは自助」と言う人はいるでしょうか？あなたはあなた、そして、行政は行政、企業は企業、市民は市民でという役割論ではなく、対等にとともにつながって、力を出し合って乗り越えていく、社会をよくしていくという時では

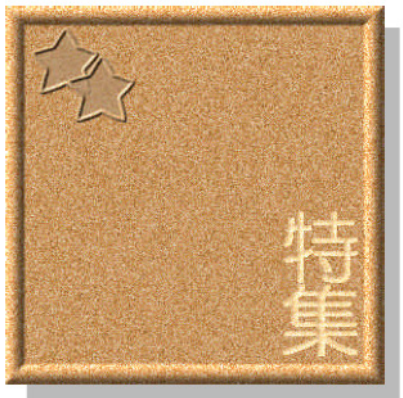
ないかと思うのです。そこにはかならず心が通い合うので、つなぎ止める「絆」ではなくつながり合う「和」が生まれ、その「和」は「希望」に向かうはずだ。このしなやかさを持つ「協助」こそ私は大切だと考えるのです。

さて、四月頃だったでしょうか、小池都知事は新型コロナウイルスに対する国の施策に対して「冷房と暖房を両方使うと言うことか」と批判をされたことがありました。私も当初は、命を守るために今は我慢をして乗り越える時ではないかと考えていました。しかし、この状況が続き経済が疲弊していくにつれ、苦しみ声は私の周りでもよく聞かれるようになりました。現社会は「コロナから命を守る自粛生活」と「国と国民生活をまもるための経済活動」の両方を大切にしない立ち行かない社会なのだということを痛感しました。子どもたちの世界でも同じようなことが言えます。休校、自粛の中で「楽しさ」が失われ、ストレスをため生活や行動のバランスを崩していく子どもたちの様子を目の当たりにしました。さらには、自殺する子どもたちの数が増加しているという悲しい報道もありました。つまり、私たちは、個人のレベルでも欲求を「自制すること」と「満たすこと」という矛盾を抱えつつ生きていかなければいけない宿命を持った生き物であるようです。

しかし、ホセ・ムヒカさんは、この世の中を「作り出した自らさえもコントロールできなくなった超消費主義社会」と指摘し「現在の超消費主義のお陰で、私たちはもっとも肝心なことを忘れてしまい、人類の幸福とはほとんど関係のないことに、人としての能力を無駄に使っている。人間のもっとも大事なものが『生きる時間』だとしたら、この消費主義社会は、そのもっとも大事なものを奪っている」とおっしゃいました。「自制」と「満たすこと」ことのバランスを超えた「超消費」、つまり「欲望」社会を指摘している言葉だと思えます。

コロナ禍は、これからの私たち人間のあり方を考え直させるための一つの試練なの





## 豊かな成長を応援する

相談の現場から思ふこと  
社会福祉士・児童相談支援専門員

小林 亜希子



ひゅーるぼんの相談窓口には、こどもの育ちに関する様々な相談が寄せられます。「幼稚園に通い始めたけれど、お友達の輪にうまく馴染めていないみたい」「言葉を話し始めるのが遅くて心配」「学校に行くのが辛い」といった、様々な心配事や不安が聞かれます。丁寧にお母さんやお父さんのお話を聞かせていただきながら、こどもたちが自分らしくいきいきと成長していくためにはどうしたらいいだろうと、私たちは思いを巡らし、一緒に考えます。こどもたちの豊かな成長、そして豊かな生活とは一体どのようなものなのでしょう。

ママ友、子育ての先輩とのつながりや相談の機会が少なくなったことで、いつも以上に些細なことが気になったり、孤独や不安を感じやすくなっている人が増えているのかもしれない。反対に考えると、人との繋がりは、私たちに安心感をもたらしていたことに気づきます。コロナ禍にあっても、人との繋がりに自分自身を感じたり、共感できること、認め合えることの大切さを感じます。

また、「人が幸せを感じるのとはどんな時か」を考察したある研究では、①安心・安全を確保できた時②誰かに喜んでもらったり役に立った時③目標を達成した時の3つに大きく分類されるそうです。こうした状況の中、教育分野では、これまでの知識偏重の教育の中で心を育むことが後回しにされてきた現状がありました。近年では知識を得る教科の学習だけでなく、「非認知能力を育てる」ことの重要性が謳われ、文部科学省が示す学習指導要領に明記されました。IQやテストのように数値化できる認知能力とは違い、非認知能力は目に見えない感情や心の働きといったような、数値化しにくい力のことです。例えば、自分で目標に向かって頑張る力ややり抜く力がある、感情をコントロールすることができ、まわりの人と円滑にコミュニケーションができる、自分を大切にできる、自分のこと

は自分で決められる、などなど挙げればきりがありませんが、総じて「生きる力」とか「人間力」と言い表されるような力です。このような力を育むこと、発揮していくことは、もちろんこども時代だけでなく、人間が生きていく上で生涯を通して重要なことと言えるのではないのでしょうか。

### ● 広島ピースアートプログラム アート・ルネッサンス 2021



この度はたくさんのご応募ありがとうございました。今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、従来の会場での展示ではなく、応募いただいた全ての作品をインターネット上で公開いたします。実際の作品を見ていただくことはできませんが、ネットに繋がれば、いつでも、どこでも、何度でもご覧いただけます！ぜひ、公開をお楽しみに☆

作品公開期間：  
2021年2月1日(月)～2月28日(日)  
ひゅーるぼんホームページ内のアート・ルネッサンス特設ページにて公開予定。

現代社会は、核家族化による子育ての孤立や、人や地域社会のつながりの希薄化が盛んに叫ばれています。2020年は特に、コロナウイルスの感染拡大により、様々な行事が中止され交流の機会が失われたり、警戒心を高めるあまり、心ない誹謗中傷が起こるなど、人々との距離が物理的にだけでなく疎遠になっていくことを感じられた方も多かったのではないのでしょうか。私たちのセンターでも、子育て中のお母さんからの相談の電話が大変増え、その中で、乳幼児健診が受けられなかった、いつも安心して参加していた集いの場に参加できなくなった等のお話を多く聞きました。普段の生活の中

世界に目を向けると、先進国の「こどもたちの幸福度」を測る調査の結果が、2020年9月にユニセフから報告されました。日本は38カ国中20位という結果となったそうです。5歳～14歳のこどもの死亡率の低さ、過体重・肥満である5歳～19歳のこどもと若者の割合はいずれも平均より低く、「身体的健康」においては1位。それとは裏腹に、15歳時点で生活満足度の高いこどもの割合はトルコについて2番目に低く、15歳～19歳の若者の自殺率も平均より高いことから、「精神的幸福度」は38カ国中37位という結果でした。身体的、物質的には恵まれていても、幸せ感が低いというのです。「スキル」の面でも「読解力・数学分野での基礎的習熟度」よりも「すぐに友達ができる」といった社会的スキルの面では自信のなさを感じるこどもが多いという結果が出ています。

また、「人が幸せを感じるのとはどんな時か」を考察したある研究では、①安心・安全を確保できた時②誰かに喜んでもらったり役に立った時③目標を達成した時の3つに大きく分類されるそうです。こうした状況の中、教育分野では、これまでの知識偏重の教育の中で心を育むことが後回しにされてきた現状がありました。近年では知識を得る教科の学習だけでなく、「非認知能力を育てる」ことの重要性が謳われ、文部科学省が示す学習指導要領に明記されました。IQやテストのように数値化できる認知能力とは違い、非認知能力は目に見えない感情や心の働きといったような、数値化しにくい力のことです。例えば、自分で目標に向かって頑張る力ややり抜く力がある、感情をコントロールすることができ、まわりの人と円滑にコミュニケーションができる、自分を大切にできる、自分のこと

は自分で決められる、などなど挙げればきりがありませんが、総じて「生きる力」とか「人間力」と言い表されるような力です。このような力を育むこと、発揮していくことは、もちろんこども時代だけでなく、人間が生きていく上で生涯を通して重要なことと言えるのではないのでしょうか。

### ● 平和を奏でるピアノのタペ (報告)

9月18日、園庭で被爆ピアノを使った音楽イベントを行いました。コロナ禍の中、「地域そして多くの方々と音楽を通してつながりを」という思いで実施したこのコンサート。Youtubeでの配信も大変好評でした。このコンサートを支えてくださったひろしま被爆ピアノ友の会さん、ピアノ調律師矢川光則さん、そして、すばらしい演奏をご披露くださった上原幸香さん、沖田千春・孝司さん素敵な時間をありがとうございました。

人々につながりと平和への思いを生み出す音楽の力に心の底から感動したひとときでした。



「こどもたちが人とつながりの中で自分のよさを認められ、自分や人を好きでいられる。そんな「幸せ」を感じながら成長していくことを応援したいと思っています。」



賛助会員 Hull Fan 年間4,000円  
お申し込みは [www.hullpong.jp](http://www.hullpong.jp) から

私たちの活動は  
あなたのおこころざしで  
もっとあたたかく  
やさしくみまいます  
ぜひ私たちを支援ください



このご寄付は税制上の優遇を受けることができます

この子らと世に光を... 輝くこと、伝えること、創ること  
発行者：認定NPO法人ひゅーるぼん 広報委員会  
発行日：2020/12/20 (年2回発行)  
ひゅーるぼん会報”うつららのほし”

文字が小さくご不便をおかけします。この会報はweb [www.hullpong.jp](http://www.hullpong.jp) では拡大してご覧いただけます。